

札幌開拓の先駆け～発寒



▲春日緑地にある2つの碑。右が①発寒開村記念碑、左が②永田休蔵之碑

北海道開拓の礎として、琴似に次いで屯田兵が入植した発寒。この地には歴史を感じさせる開拓関連の碑や史跡の碑が建っています。

先人たちが幾多の苦勞を重ね切り開いてきたこの地は、時代とともに姿を変え、宅地化が進行し、工業団地に見られる各種工場が建ち並ぶようになりました。

現在では、高層マンションや大規模商業施設が次々と建設されています。そんな中昔の面影を残すものは少なくなりつつあります。

今回は古くからの開拓地である発寒について、歴史を刻んだ「碑」を中心に振り返ります。

★ ★ ★ 発寒の由来

発寒の地名は、この地にサクラドリが群生していたことから、アイヌ語の「ハチャム・ペツ」(サクラドリのいる・川)に由来するといわれています。

また「発寒」の漢字が当てられたのは明治四(一八七二)年で、開拓使によって正式な地名となりました。

碑に秘められた 歴史の跡

① 発寒開村記念碑きねん

JR発寒中央駅からすぐのところ、はっさむ地区センターの裏手にある春日緑地。ここには二基の碑が並んでいます。一つは「②永田休蔵之碑」、もう一つがこの碑です。共に、発寒の地に開拓の大きな足跡を残した在住武士たちを記念した碑で、歴史的に由緒あるものです。

安政四(一八五七)年、幕府の在任制度により、山岡精次郎、永田休蔵ら旗本・御家人などが集団で発寒に入りました。これが後の屯田兵制度の基となったことを記念して、この碑が建立されました。

在任制度とは、幕府が武士を北海道に送り、開墾と防衛のために定住させた制度のこと。幕府は、夏期だけ役人を出張させる「勤番制」では、北海道の警備が十分にできなかったため、現地に長期間住まわせる方法を採用することにしました。

しかし、この地での生活は、住居こそあらかじめ建てられていたものの、食糧など生活に必要なものは自力で賄うと

※サクラドリ…ムクドリのこと。